

爪が2本奇麗に分離されて、中間に黄色を見る如く見てゐない點から、第1圖乙の如き形狀を呈してゐた事と思はれる。(甲圖は標準型)

このメリディヤニ灣から東へ續くサベウス灣は、大した變化も認めず、中央部のシゲウス港も、15極級以上の器械使用の観測者に依つて認められてゐる。

南方へ移つて、1939年の大接近には殆んど消失したかに見受けられたバンドーラ海峡は、今回の對衝には、稍々濃度を復活して、15極級以上に認められる位の濃度となつたが、これとて、視狀の悪い場合は、25極級にも餘り濃い存在ではなかつた。特に中央部が淡く、兩基部——即ちイヤニウム海に近い側、及びマルガリチフェル灣に接する側は、共に濃度は稍々濃い。

上記マルガリチフェル灣は、濃い“アリンの爪”に比較すると、随分淡いが、併し、美しい逆圓錐形を示し、前田氏は若葉色、渡邊氏は青綠色と観測してゐる。マルガリチフェル灣の先端に近いオキジャ沼は、渡邊氏に依り、十日23日2時の見取圖にスケッチされてゐる。

バンドーラ海峡の東基部より發して、ヘラス大陸の西側を斜に南下し、ヘレスポンチカ低地に達してゐるヘレスポントス海溝は、渡邊、前田、木邊部長、頼、森、瀧田、保積及伊達の各観測者に依つて認められており、非常に濃く、美しく南極附近へ斜に延びた様子は、素晴らしいものであつた。そして、その南端に、ヘレスポンチカ低地が相當濃く認められた。

運河 この地區の赤道以北のアエリヤ、アラビヤ、エデンの廣大な範圍に渉る沙漠地方には、ロニエル、スキヤパレリ、マヂニ諸氏に依ると、蜘蛛の巢狀の網狀運河が、星形に形成されてゐる地域ではあるが、今回の火星赤道の傾きが北方へ甚しかつたため、この方面の運河は、半調色検出に独自の視力を有する渡邊氏にも認められなかつた。

南半球に移つて、前記ヘレスポントスとバンドーラ海峡の間の地域に、2本稍々著しい運河があるが、この中、西方のカルコボロス運河は渡邊氏が検出してゐる。東方のヒルスは誰も認めてゐない。

“アリンの爪”からオキジャ沼へ走る大きくカーブしたカンタブラス運河は、淡い乍ら、渡邊氏に依つて描かれてゐる。(つづく)

註——火星表面名稱は、天界217號口畫及圖說天文講座第4卷“遊星”の中の火星圖參照され度し。

天 界 正 誤 表

第252號(昭和17年第6號)

索引第6頁左欄、日蝕：1941年九月21日
第184頁、標題

第253號(昭和17年第7號)

第227頁第10—11行目
〃 第11—12行目
第228頁第7行目

誤

皆既直後の後送
ストップ・テチ

2.5遠鏡は
強力なものと米望なり
時につき徑50の

正

皆既直後の放送
ストップ・テチ

2.5米望遠鏡は
強力なものとなり
口徑時につき50倍の